

琉球の赤絵の歴史について

垣花 隆夫

琉球の赤絵が高い評価を受け、脚光を浴びたのは、かの民芸運動の指導者・柳宗悦の功績が大きい。柳宗悦は昭和十四年『工芸』九十九号で、「沖繩の焼物を見せられたら、色々ある中で誰の眼にも止まるのはおそらく赤絵であろう。さうしてこんなにも美しく柔らかい赤絵が此の世にあるのかと驚くであろう。（中略）古い伊萬里や九谷が磁器の赤絵で天下に名を成すなら、琉球は陶器の赤絵で其の名を響かせていい。」と絶賛している。今では赤絵は壺屋焼を代表する焼き物である。

現在、那覇市立壺屋焼物博物館で特別展「壺屋焼近代百年のあゆみ」が開催されている。この中に琉球王朝末期から明治、大正、昭和時代にかけての赤絵の製品や資料が数多く展示紹介されている。琉球赤絵を代表する梅竹文碗、鶴文細首瓶等の優品と共に注目するのはパネル展示の東京国立博物館所蔵の赤絵の茶家である。これはかつて浦添市美術館の国立博物館巡回展で実物展示されたものである。（その他に赤絵の耐家、盃がある。）これらが明治十八年に沖繩県より購入されたとする記録が編年上重要であるとする。

ところで、今回の特別展をみて、琉球の赤絵の歴史が思いのほか浅い事に当惑し、疑問を抱かれた方が多いのではないだろうか。これまで琉球の赤絵の起源は一六七〇年、平田典通が渡唐し中国より技術導入したとする考えが通説であり美術書や歴史書にも広く引用されてきた。しかし最近ではこの説に疑問を持つ考えも散見されるが、これについて詳しい調査研究が行われていないのは残念である。

私は、三十年近く、琉球の古陶に魅せられ多数の古陶器に出会い、蒐集し、多くのふれあいと感動を味わってきた。そして古陶器の形状、胎土、釉薬、釉掛けの技法等を細かく観察していく中で、窯場の違いや形、釉薬の時代的な変遷に強い関心を持つ様になり、これ迄の琉球古陶の分類や研究がいかに曖昧で停滞しているかを識った。そこで近年発掘調査のすすむ喜名古窯や壺屋、湧田窯跡の出土品、調査報告書、及び文献資料等を対比させながら、出来るだけ多角的に琉球古陶の編年を考察してきた。ここで琉球の赤絵の歴史に関する持説を述べて、諸兄の御判断と御指摘を仰ぎたい。

琉球の赤絵の上限を康熙九年（一六七〇年）の平田典通による中国からの技術導入とする説の唯一の根拠は、文献資料『宿姓家譜』に平田典通の業績として書かれた「渡唐上京仕、五色玉上焼物薬稽古仕り、帰国に…」の五色玉上焼物薬の解釈に基づいている。この五色玉上焼

かきのはな たかお：（医師）

物薬を単に赤絵の釉薬とする説と、五色の上焼物薬と玉とに区分して赤絵とガラス玉とする説がある。まず五色玉について述べてみたい。

『琉球国由来記』（一七一三年）には当時代の技術門に、専門職種として、「瓦工」「陶工」と別に「玉焼」の職工が独立しており、玉焼の項に「五色玉焼、始ニ康熙九年庚戌。宿氏興那城筑登之典通、今稱二平田一。入レ閩稽古ニ製作一也。」と記述されている。又、『琉球歴代陶工家譜』（比嘉朝健編集）によれば五色玉諸焼物薬の技法は平田典通により平田典寛そして仲宗根喜元に伝授され、王の御冠の玉、唐衣装の提鳴玉、露玉の修復や玉風鈴の製作等が行われている。こうした記録から五色玉はガラス玉であることが確認される。

次に、「上焼物薬」についてどの様な釉薬であったかを考えてみたい。家譜によれば平田典通は渡唐する以前の康熙四年（一六六五年）頃より上焼物製作のため県内各地を回って「焼物薬種並白土」を調べ上焼の胎土や釉薬の試し焼きを何度も工夫研究している。この時期は喜名や湧田ではすでに荒焼が作られており、平田典通が読谷山や知花の地に足を運んだ事は容易に想像がつく。そこで喜名焼の泥釉や灰釉（クワディサー）、黒釉等も見聞し、その釉の開発にも関与した可能性は大きい。

ところで上焼の初期（湧田・壺屋初期）の釉薬は、灰釉と鉄釉が基本である。こうした初期の製品は、窯の燃焼温度や酸化還元、鉄分の配合量等により、青磁釉、古瀬戸風の土灰釉や黒、鉛、柿釉に変化し、釉調も不安定で釉むら、釉なだれ、釉の流下や窯変等が多い。それがかえって大らかで大胆な釉掛けと共に、初期的な味わいのある色合いや風合いを醸し出している。これら初期の製品には、透明釉（石灰）や緑釉（銅）、呉須釉（コバルト）はみられない。

その初期の釉薬をさらに分析してみると、平田典通の「上焼物薬」とは喜名焼等の失透性の釉とは異なり、ガラス化した透明性のある灰釉、鉄釉であり、其の調配合の技法のことではないだろうか。私は門外漢ながら、これまでの木灰、土灰と鉄分の配合に新たに珪酸分を多く含んだ長石、白土（具志頭白土）を加えた調合の技法と推測する。それに胎土に白土を利用したものと考える。この様に釉薬の基礎的な調合が工夫されている時期に、複雑で高度な技法を要する赤絵が同時に製作されたであろうか。

琉球の赤絵の製法は、先ず成形した素地に白化粧土と透明釉をかけて一二〇〇度近い温度で本焼きをした後、次に透明?の上に色絵を上絵付して更に八〇〇度前後で二度焼きが行われる。この様な白化粧土、透明釉、色絵釉、二度焼き等の技術があれば、平田典通、平田典寛、仲宗根喜元（唐物主取）は、当時の上焼の指導者として他の施釉製品にも当然応用してしかるべきである。しかしながら、赤絵と初期の施釉製品を比較すると、形態的にも技術的にもあまりに違いがありすぎる。これらの事から平田典通によって導入された「上焼物薬」が赤絵であるとは到底考え難い。改めて赤絵の遺品をみてみよう。これ迄王府関係の玉陵や首里城跡の出土品等を含め伝世品に至るまで一七〇〇年前後の古い形態を持つ赤絵は未だ一例も報告されていない。そこで現存する赤絵について詳しく検討してみたい。琉球の赤絵は当時上流階級にむ

けての上手物ではあったが、素地本体はそのほとんどが他の施釉製品と同じ物が使用されており、その形態的特徴から製作年代がほぼ推測できる。赤絵の碗、茶家、耐家、瓶等を各々について、全体の形状、口づくり、耳（文様の有無）、高台底面の形、釉掛け等を観察すると、いずれも一九世紀以降の製品の特徴をもっている。地釉は基本的に白化粧掛けと透明釉であるが、時代が下ると紫泥釉や鉄釉、瑠璃釉（コバルト）もみられる。

色絵は赤、緑、黄、青が主体で染料として酸化銅や酸化コバルトも使用されており、絵文様は松、竹、梅、椿、菊、撫子、唐草等の草花文が多く、鶴、亀、雁等の動物文や幾何学文様等の図柄も描かれている。色調や絵柄はほぼ類似しており、一連の時期に製作されたことがうかがえる。

一九世紀前半に製作された伊万里色絵鶴唐花文細首瓶を写したとされる赤絵鶴文細首瓶（九州陶磁文化館、家田淳一氏報告）や国立博物館所蔵（明治一八年購入）の赤絵の茶家、耐家等はいずれも一九世紀中期から後期にかけての製品である。

ところでこの時期に注目される陶工に四代目仲村渠致真がいる。『用姓家譜』に道光一八年（一八三八年）中国に渡り、福州にて「彩色並びに満花其の他色々の焼物相調べ…」とあり、新たな釉薬の技法を導入したことが記述されている。文献上、色絵を示唆する記述はこれが初めてである。

また、『那覇市史資料篇』の王朝末期の呈文に仲村渠致真と思われる陶工が二題記録されている。一題はかつて中国で学んだ「中華染色の法」をより完成させるため、染料の土石を求めて八重山への渡島願いを申し出た件であり、二題目は前回の渡唐で学習できなかった「金鍍白色等法」（金爛手？）を学ぶために再度の中国行きを願い出ている件である。いずれも色絵の開発研究を示唆しており、人一倍研究熱心な陶工であった事がうかがえる。

これ迄、私が琉球の古陶器の形状、土、釉薬、釉掛け等の年代的推移をみてきて、赤絵と呉須釉、白化粧土の出現はほぼ同時期であると推察している。（但し、白化粧掛けに関して、一八世紀前半、白化粧土に灰釉をかけたと思われる製品が油壺や瓶等にあり、一時期使用された可能性がある。）

この様に赤絵に関する文献資料や遺品の分析、他の施釉製品との年代的対比等を考えると、琉球の赤絵の起源は一九世紀中頃であり、その導入に仲村渠致真が大きく関わっていると私は考察している。

赤絵の歴史が下る事は愛陶家としてはしのびない。しかしながら、この事によって琉球の赤絵の美に対する評価は揺らぐことはない。そのあたたかい化粧土の白さと、柔らかくのびやかな色絵付があれば、赤絵は今後も多くの人々に愛され、沖縄を代表する焼物として発展していくものと確信している。